

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 28 日現在

機関番号：34307

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26380858

研究課題名(和文) 母親の被害的認知による虐待メカニズムの解明 - 情報処理上の歪曲に関する検討 -

研究課題名(英文) The abuse mechanism by a mother's victim cognition - Study on distortion in information processing -

研究代表者

川西 千弘 (KAWANISHI, Chihiro)

京都光華女子大学・健康科学部・教授

研究者番号：70278547

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は潜在的測度(被害-健康IAT)および顕在的測度(母親養育意識尺度)で個人差を測り、これと不適切な養育行動(セルフ・レポート式)およびゲームシミュレーションで得られた指標との関連を検討した。共分散構造分析の結果、母親の顕在的被害意識は、いずれの指標においても不適切な行動に影響を及ぼしていた。また自分と健康の潜在的連合が強いことが、ゲームにおける子どものネガティブ行動回数の記憶をより正確にする傾向が示された。

研究成果の概要(英文)：This study measures individual differences in implicit measure (be harmed-health IAT) and explicit measure (maternal consciousness scale), and the relationship based on these individual differences and the inappropriate child rearing indices obtained by self-reporting and game simulation was examined.

A CSA(Covariance Structure Analysis) revealed a significant causal relationship between their explicit victim cognitions and misbehaviors to their children and the child character on the game. Also, mothers with an implicit association of health with themselves have more accurately remembered the number of child character negative behaviors in the game.

研究分野：社会心理学

キーワード：虐待 被害的認知 IAT

1. 研究開始当初の背景

虐待を防止するには、親の子どもへの被害的認知に着目し、社会的認知研究の視座から体系的に虐待メカニズムを解明して、教育プログラムを構築する必要がある。川西・土居(2012・2013)は、被害的認知の個人差検出のための母親被害意識尺度(顕在的測定)と被害 IAT(潜在的測定)を独自に作成し、乳幼児を養育中の母親を対象に調査し、これら個人差とセルフ・リポート式で明らかになった不適切な養育行動との関連を明らかにした。しかし、この被害的認知が何故不適切な養育行動をもたらすのかについては、依然ブラックボックスのままであった。

2. 研究の目的

本研究では上述したプロセスを明らかにすべく、母親被害意識尺度(以下、母親のポジティブな養育も同時に測定し分析したので、母親養育意識尺度と記す)と被害 IATにより個人差を弁別し、社会的認知研究の理論と手法を用いて、母親の子どもや養育に対する情報処理上の歪曲(反応的歪曲を含む)を精査し、日本の母親が抱える問題に即した虐待メカニズムの解明を目指す。

ただし、従前は不適切な養育行動を測定するのにセルフ・リポートを用いたため、参加者の防衛が入る懸念を払拭できなかった。そのため、本研究ではコンピューター上で参加者の誘導により幼児キャラクターが迷路を脱出する仮想ゲームを作成し、これにより、参加者が駄々をこねる子ども(幼児キャラクター)への反応を直接検出する他、幼児キャラクターの印象・幼児キャラクターの駄々をこねたアクション回数(記憶)など、様々な角度から検討を試み、より現実へ汎用性の高い知見の獲得を目指した。

3. 研究の方法

(1) 調査方法の改善と準備

本調査では以下の2点について改善と準備を行った。

①被害 IAT の改良：従前の被害 IAT は、被害一加害が属性概念のため、刺激語がネガティブ単語ばかりであった。しかし、調査参加者の心理的負担を考慮し、かつ健全性の測定を可能にするため、本調査から属性概念を「被害」「健康」とし、刺激語は「安心できる」「泣かされる」などを用い、刺激語リストをポジティブとネガティブ各5項目ずつに改良した。ただし、対象概念は従来通り「自分」「子ども」であった。なお、以下この IAT を改被害 IAT と記す。

②ゲームシミュレーション課題(迷路脱出コンピューター・ゲーム)の開発：迷路途中8ポイントで、幼児キャラクターが動かなくなり「泣く」または「怒る」という感情を表出し、参加者がそのポイント毎に幼児キャラクターを誘導する力のレベルを判断する課題を行う。なお、迷路移動中何れの場所でも、

幼児キャラクターに対し「微笑みかける」「しかる」という参加者の意思表示が出来るようになっていた。従属変数として、ゲーム過程では参加者の①各ポイントで誘導する力レベル、②「微笑みかける」「しかる」の各回数、③グリップ強度(生理的指標)を測定し、ゲーム終了後、④幼児キャラクターについての印象(「かわいい」「かしこい」など5項目)と⑤幼児キャラクターがアクションを起こした回数(④と⑤は質問紙)に回答を求めた。①②③は反応、④は印象(解釈)、⑤は記憶の測定となる。

(2) 本調査

本調査は、乳幼児を養育中の母親105名を対象に、個別に実験目的を説明した上で、①ゲームシミュレーション課題⇒②改被害 IAT⇒③母子場面想定法⇒④母親養育意識尺度⇒⑤養育行動尺度⇒⑥詳細なディプリーフィング⇒⑦謝金(QUOカード)の支払いと領収⇒⑧同意書・確認書の記載の順で実施した。また、ゲームシミュレーション課題と改被害 IAT の順番は参加者間でカウンターバランスし、両測定の間互いの影響をできるだけ相殺するため10分程度休憩時間を設けた。

なお、母子場面想定法、母親養育意識尺度および養育行動尺度はセルフ・リポート式質問紙であり、川西他(2012・2013)と同様のものを用いた。③母子場面想定法は、幼児の行動がネガティブな母子相互場面(以下、無場面と記す)と子どものネガティブな行動を緩和する情報を付加した場面(以下、有場面と記す)を順次紙面提示し、各場面につき、登場する幼児の印象、幼児の行動の帰属そしてその幼児への対処方略について、いずれもSD法(7件法)で回答を求めた。④母親養育意識尺度は、母親の子どもや養育に対する意識を調査する62項目からなり、「あてはまる」を5とする5件法で回答を求めた。⑤養育行動尺度は日頃の育児行動の内容と頻度を明らかにする27項目からなり、「よくある」を5とする5件法で回答を求めた。

4. 研究成果

研究の主な成果は、以下(1)~(5)のとおりである

(1) 尺度の構成

①改被害 IAT : Greenwald, Nosek & Banaji (2003)に基づき Dスコアを算出し、得点が小さいほど子どもに比べ自分と被害との潜在的連合が強くなるよう数値化した。

②母親養育意識尺度 : できるだけ安定した結果を得るために、2012・2013に本研究データを接合して全体(363名)として因子分析(主因子法、プロマックス回転)を行い、以下の5因子が抽出された(「子どもがいてくれるので、人生が充実したと思う」など「成長充実」〈7項目〉; 「子どものために、仕事や趣味など自分のしたいことができない」など「アイデンティティ喪失感」〈5項目〉; 「子どもにバカにされているような気がする」な

ど「被害的解釈」(8項目)；“子どもをみていると自分の悪い部分が映し出されているように思う”など「短所への脅迫」(4項目)；“子どもは自分の夢をかなえてくれる”など「過剰期待」(3項目)。

上記因子分析結果に基づき、本調査分(105名)の各因子の内的整合性を確認するために α 係数を算出した。結果は、「成長充実」.758；「アイデンティティ喪失感」.748；「被害的解釈」.764；「短所への脅迫」.722；「過剰期待」.505であった。「過剰期待」のみ十分な内的整合性を確認できなかったが、これ以上項目を削減しても α 係数の改善はみられなかったため、安定性を考慮して3項目で構成した。なお、「アイデンティティ喪失感」「被害的解釈」「短所への脅迫」が被害意識に関連するものであり、「過剰期待」は権威的あるいは高圧的な意識が反映されていた。

③養育行動尺度：上記と同様の理由で、やはり2012・2013に本研究データを接合し因子分析(主因子法、プロマックス回転)を行ったところ、以下の5因子が抽出された(“ほめる”など「愛情行為」(6項目)；“たたく”など「身体的暴力」(4項目)；“無視する”など「心理的嫌がらせ」(5項目)；“甘やかす”など「甘やかし」(3項目)；“キスをする”など「愛情接触行動」(2項目))。

上記因子分析結果に基づき、本調査分(105名)の各因子の内的整合性を確認するために α 係数を算出した。結果は、「愛情行為」.619；「身体的暴力」.454；「心理的嫌がらせ」.742；「甘やかし」.519。なお、「心理的嫌がらせ」以外は、内的整合性が十分ではないが、上述した因子分析結果に基づいていることおよびこれ以上項目整理をしても α 係数が改善せず、平均値の安定性も考慮して、これらの項目内容で下位尺度を構成した。ただし、「愛情接触行動」については2項目であり平均値の安定性に問題があることおよび本研究の主目的に關与する側面ではないため、以下の分析から除外した。

④母子場面想定法：印象の5項目で α 係数を算出したところ、緩和情報有場面・無場面いずれでも「活発な」を除くと十分な内的整合性が確認されたので、4項目の平均値を以下の分析に用いた(緩和情報無場面 α =.701；有場面 α =.766)。また、対処方略の4項目でも α 係数を算出したところ、緩和情報有場面・無場面いずれでも「どうしていいかわからずオロオロする」を除くと α 係数が上昇することが確認されたので、3項目の平均値を以下の分析に用いた(緩和情報無場面 α =.700；有場面 α =.666)。しかし、帰属では低い α 値しか得られなかったため各項目で分析した。

⑤ゲームシミュレーション課題：(a)各ポイントで誘導するカレレベルについては、8ポイントの平均値を求め指標化した(以後、カレレベルと記す)。(b)「微笑みかける」「しかる」

については各回数を指標としたが、「微笑みかける」については、クリックやスクロールと混同し操作ミスと判断される外れ値を出した参加者が複数見受けられたので分析から除外し、「しかる」のみ以後の分析に用いた(以後、叱責回数と記す)。(c)グリップ強度(生理的指標)については、ゲーム中全体の強度の平均値、幼児キャラクターが泣くなどのアクションを起こす前と後のグリップ強度の平均値を求めて、以下の分析に用いた(以下、各全グリップ強度；前グリップ強度：後グリップ強度と記す)。(d)幼児キャラクターの印象については、 α 係数を算出したところ全5項目で.763になり、十分な内的整合性が確認されたので、これらの平均値を算出して以下の分析に用いた(以後、キャラクター印象と記す)。(e)幼児キャラクターがアクションを起こした回数については、再生数を指標とした(以後、アクション回数と記す)。

(2) ゲームシミュレーション課題の妥当性の検証

①ゲームシミュレーション課題と養育行動尺度との関連性：ゲームシミュレーション課題で測定した各指標と実際の養育行動との間の関連性を確認するために、各下位尺度を用いて相関分析を行った。

その結果、カレレベル・叱責回数・グリップ強度・キャラクター印象・アクション回数は養育行動のいずれの下位因子(「愛情行為」「身体的攻撃」「心理的嫌がらせ」「甘やかし」とも有意な相関は見られなかった。

これらのことは、ゲームシミュレーション課題で測定される各指標は、セルフ・リポート式で母親が申告する養育行動とは異なる側面を測定している可能性を示唆していた。

②ゲームシミュレーション課題と場面想定法との関連性：上記と同様にゲームシミュレーション課題の各指標と場面想定法の対処方略との間の関連性を確認するために、各下位尺度を用いて相関分析を行った。

その結果、カレレベルは緩和情報有場面・無場面いずれの対処方略とも有意な正の相関がみられた($r=.271$ ； $r=.293$ いずれも $p<.01$)。これをより詳細にみていくと、緩和情報有場面ではたたくなど「身体的にしかる」項目とのみ有意($r=.341$, $p<.001$)であったが、無場面では「身体的にしかる」「言葉でしかる」「愛情が萎える」いずれの項目とも有意な正の相関がみられた(順に $r=.241$ ； $r=.246$ ； $r=.209$ いずれも $p<.05$)。ただし、叱責回数、アクション回数およびいずれのグリップ強度でも対処方略との間には特に有意な関連はみられなかった。また、キャラクター印象は緩和情報有場面・無場面いずれの印象とも有意な正の相関がみられた($r=.436$ ； $r=.390$ いずれも $p<.001$)。

これらのことから、ゲームシミュレーション課題で測定される指標のうち、幼児キャラクターが泣く・怒るなど駄々をこねて迷路を進むことを妨げた際、その幼児キャラクター

の手を引っ張る力の強さは、子どもとのネガティブな相互作用を想定した時の対処方略と類似したものを測定しており、例え緩和情報がある場面でも「身体的にしかる」という行為と連動していることが明らかになった。また、印象についてはネガティブな行動をとる子どもに関しては類似した印象を抱きがちであることが示された。

(3) 母親の顕在的・潜在的被害的認知が養育行動へ及ぼす影響

母親の子どもや養育に対する被害的認知（顕在的および潜在的）が不適切な養育行動を促すという因果関係を想定し、予備分析結果を基に共分散構造分析を行った。ただし、母親養育意識尺度や養育行動尺度がポジティブな側面も含んでいたため、今回はその影響についても加味してモデルを構成した。母数の推定方法には最尤法を用いた。分析の結果適合度は $\chi^2(16)=16.12$ (n, s.) GFI=.964, AGFI =.919, CFI=.999, RMSEA=.009で、十分な値が示された（以下、 $\langle \rangle$ 内の数字は標準化推定値である）。

図1のとおり、顕在的測度である「成長充実」は「愛情行為」を $\langle .31, p<.01 \rangle$ 、「短所への脅迫」は直接「身体的暴力」「心理的嫌がらせ」「甘やかし」を引き起こすとともに $\langle \text{順に}.30; .31; .27$ 共に $p<.01 \rangle$ 、「愛情行為」を抑制する $\langle -.25, p<.01 \rangle$ ことが明らかになった。「アイデンティティ喪失感」は「心理的嫌がらせ」を促進していた $\langle .18, p<.05 \rangle$ 。さらに、潜在的測度の改被害 IAT は「身体的暴力」に対して正の影響を与える傾向が示された $\langle .16, p<.1 \rangle$ 。

これらのことから、自分の欠点を子どもに投影して嫌になったり、子どものせいで自らのアイデンティティが侵食されるなどの被害意識を持つ母親は、不適切な養育行動を行いがちであることが示された。ただし、自分に比べ子どもと被害の潜在的連合が強い、つまり子どもが被害的で「やられる」存在であるということを非意識的に容認している母親は、より容易に身体的攻撃を行う傾向も示された。

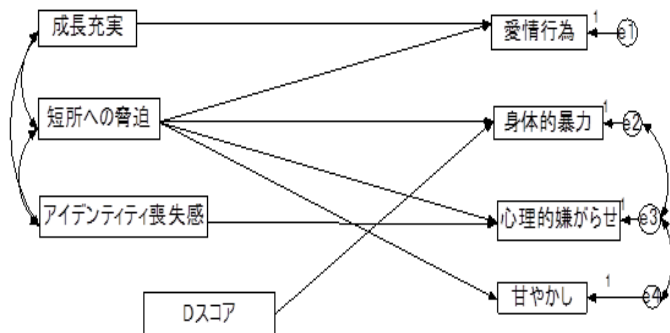


図1. 母親の養育意識が養育行動へ及ぼす影響

(4) 母親の顕在的・潜在的被害的認知がゲームシミュレーション課題へ及ぼす影響

母親の被害的認知（顕在的および潜在的）がゲームシミュレーション課題の際に与える影響を考察するため、予備分析結果を基に共分散構造分析を行った。母数の推定方法には最尤法を用いた。分析の結果適合度は $\chi^2(8)=6.01$ (n, s.) GFI=.978, AGFI =.942, CFI=1.000, RMSEA=.000で、十分な値が示された（以下、 $\langle \rangle$ 内の数字は標準化推定値であり、有意傾向のもののみ（実線）を記載する）。

図2のとおり、顕在的測度である「被害的解釈」は「力のレベル」と「叱責回数」に直接正の影響を与える傾向が示された $\langle \text{順に}.19; .23$ 共に $p<.1 \rangle$ 。また、潜在的測度である改被害 IAT は「アクション回数」に正の影響を与えていた $\langle .18, p<.1 \rangle$ 。

母親が子どもにバカにされているとか、操られているという被害意識をもつことが、ゲームにおいて幼児キャラクターにより強い力を出すことを促進させ、ゲーム中に叱責を多くする傾向を生みだしていた。普段から子どもの行動に対して被害的解釈を行う母親は、ゲームという仮想上の行動であっても、自らの力の回復を願って、より強いかつ攻撃的な養育行動をとる可能性が示唆された。

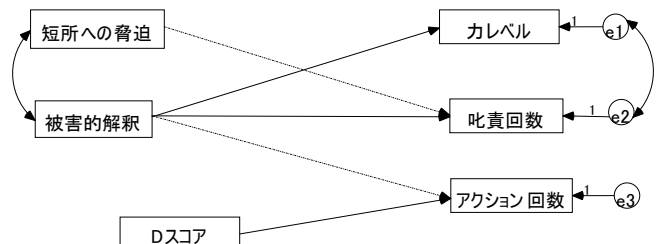


図2. 母親の被害的認知がゲームシミュレーション課題へ及ぼす影響

潜在的測度である改被害 IAT はアクション回数に正の影響（傾向）を及ぼしていたが、これは、自分と健康の潜在的連合強いことがアクション回数の再生数を促進させたことになる。この結果について、自分と被害の潜在的連合が強い母親は子どもの行動を被害的に過剰かつ過敏に解釈・記憶するために、子どもの駄々をこねる回数をより多くカウントするだろうという予測とは真逆であった。しかし、今回のアクション回数は8回であったが、Dスコアを3分割してその平均を確認すると、Dスコア低群のアクション回数は5.87回(SD=1.39)、中群は6.24回(2.32)、高群は6.80(1.85)となった（ただし、この3群間の平均値に有意差はない $F(2, 88)=1.90, n. s.$ ）。つまり、この結果を加味すると、潜在的に自分が健康的であるという感覚を持つ母親ほど、子どもが駄々をこねた回数をより正確に記憶していたことになる。これは、非意識レベルで自分が健康に母親をこなしているという感覚が、子どもや養育の際、よ

り正確で注意深い情報処理を促すのかもしれない。

なお、グリップ強度は生理的指標であり、かつこれを加味すると適正なモデル化が困難であったため、単独で分析を行った。全グリップ強度と後グリップ強度をそれぞれ独立変数に、母親養育尺度の下位尺度と改被害IATを従属変数とした重回帰分析を行った。

その結果、全グリップ強度および後グリップ強度いずれに対しても短所への脅迫は有意な負の影響が、被害的解釈は有意な正の影響が示された(全グリップ強度, 短所への脅迫 $\beta = -.310$; 被害的解釈 $\beta = .240$, $R^2 = .053$ 5%で有意)(後グリップ強度, 短所への脅迫 $\beta = -.306$; 被害的解釈 $\beta = .237$, $R^2 = .051$ 5%で有意)。

これらのことから、母親が子どもに自らの欠点を投影したり未熟さを見せつけられるという被害意識をもつことがグリップ強度を抑制させる半面、日頃から母親が子どもの行動を挑発されているなど被害的に解釈することが、グリップ強度を促進させることが示された。これらは、短所への脅迫が高いことは、子どもとのかかわりを非意識的に避けたいあるいはその補償として子どもへの罪悪感があり、そのために子どもと距離を置くあるいは子どもの自由をより認めるなどの理由でグリップ強度が抑制されるのではないかと考察された。それに対して(4)で報告したように被害的解釈は力レベルを促進することを考慮すると、やはり直接的に自分の力の回復を目指して非意識的な指標であるグリップ強度でも力が入ってしまうのかもしれない。

(5)被害的認知と母子場面想定法による知覚・解釈への歪みとの関連性

この項では、母親の被害的認知(顕在的および潜在的)の個人差が母子場面想定法に登場する幼児の印象、行動の帰属および対処方略にどのような相異をもたらすのかを検証した。改被害IATおよび母親養育意識尺度の各下位尺度平均値を基に3等分し上位・下位33%を抽出して高群・低群とし、それらと場面情報(緩和情報有・無)との2×2の分散分析を行った。なお、前者は参加者間要因、後者は参加者内要因であった。ただし、ここでは本調査の主目的である被害的認知の個人差に関わる部分のみ記載する。

①改被害IAT: 自分と被害の潜在的連合が強い人は健康との潜在的連合が強い母親より、幼児に対してよい印象を抱いていた。(改被害IAT低群 4.43 SD=0.11; 高群 4.13 SD=0.10 $F(1, 66)=4.04$, $p<.05$)。

②母親養育意識尺度 【成長充実】成長充実高群のほうが低群より幼児に肯定的印象をもつことが示された ($F(1, 62)=15.59$, $p<.001$)。また、低群のほうが幼児のネガティブな行動に対しより厳しい対処方略をとることが明らかになった ($F(1, 63)=6.74$, $p<.05$)。

【アイデンティティ喪失感】アイデンティティ喪失感高群のほうが低群より幼児に否定的印象をもつことが示された ($F(1, 71)=6.15$, $p<.05$)。また、高群が低群よりネガティブな幼児の行動をより「常に繰り返される」と帰属しがちであった ($F(1, 73)=5.42$, $p<.05$)。さらに、高群のほうが幼児のネガティブな行動に対しより厳しい対処方略をとると判断した ($F(1, 73)=6.68$, $p<.05$)。

【被害的解釈】被害的解釈高群が低群よりネガティブな幼児の行動により厳しい対処することが示された ($F(1, 65)=7.63$, $p<.01$)。

【短所への潜在的脅迫】短所への潜在的脅迫高群が低群よりネガティブな幼児の行動をより「わざとやったわけではない」と帰属した ($F(1, 86)=4.20$, $p<.05$)。また、高群が低群より厳しい対処方略を取りがちであることが示された ($F(1, 86)=3.23$, $p<.1$)。

【過剰期待】交互作用短が有意 ($F(1, 91)=9.72$, $p<.01$) で、下位検定を行ったところ、緩和情報無場面で過剰期待高群が低群よりネガティブな幼児の行動をより「悪意がない」と帰属した ($F(1, 91)=15.95$, $p<.001$)。また、高群は低群より「常に繰り返される」と帰属した ($F(1, 51)=12.26$, $p<.01$)。

表1. 母親養育意識尺度と緩和情報ごとの平均値(SD)

緩和情報	低群		高群	
	無	有	無	有
【成長充実】 肯定的-否定的(印象)	3.81(0.67)	4.06(0.51)	4.52(0.78)	4.55(0.80)
厳しい-適切(対処方略)	4.66(0.59)	4.32(0.66)	4.15(0.85)	3.91(0.90)
【アイデンティティ喪失感】 肯定的-否定的(印象)	4.37(0.83)	4.51(0.84)	3.91(0.79)	4.11(0.87)
その時-常に(帰属)	3.94(1.49)	4.31(1.56)	3.08(1.29)	3.95(1.39)
厳しい-適切(対処方略)	4.26(0.84)	3.94(0.88)	4.74(0.61)	4.32(0.82)
【被害的解釈】 厳しい-適切(対処方略)	4.23(0.91)	3.93(0.90)	4.68(0.46)	4.40(0.61)
【短所への潜在的脅迫】 非意図的-意図的(帰属)	3.70(1.57)	3.88(1.57)	4.40(1.63)	4.33(1.46)
厳しい-適切(対処方略)	4.24(0.89)	4.10(0.88)	4.67(0.64)	4.23(0.79)
【過剰期待】 善意-悪意(帰属)	3.63(0.63)	3.88(0.77)	4.13(0.60)	3.98(0.42)
その時-常に(帰属)	4.20(1.57)	4.35(1.59)	3.41(1.57)	4.08(1.40)

*左側の項目に「とてもあてはまる」を7として数値化

(6)今後の展望

本研究では日本の母親の特殊な関係性病理に注目し、子どもや養育に対する母親の被害的認知を多角的視点から取り上げた。そして顕在的被害意識(「アイデンティティ喪失感」「被害的解釈」「短所への潜在的脅迫」)が、様々な不適切な養育行動やゲーム課題での強い対処へ結びつくこと、また知覚・解釈などの歪曲を促進することなどが明らかになった。しかし、本研究は以下の課題を残している。

①潜在的測度併用による認知的歪曲の解明

Milner(2000)やBugental(1997)らが開発したのは共に質問紙(顕在的測度)のみであるが、本研究では独自に潜在的測度を開発し、個人差検出に用いてきた。Greenwald, A. G.

ら(2009)は、質問紙調査が社会的望ましさの影響を強く受け信頼性が損なわれるのに対し、IATは多くの社会的行動、特に測定する内容が社会的にセンシティブであるほど、有用性が高まることを見出しており、虐待や不適切な養育行動を扱う本研究でIATを使用することは独自で有用な試みである。

しかし、本研究で用いた潜在的測度である改被害IATでは、以前作成した被害-加害IATのように母親と被害の潜在的連合が強いことが不適切な養育行動やより厳しい対処を促進するという様な結果は得られなかった。改被害IATでは、参加者の心理的負担を考慮して刺激語リストをポジティブ・ネガティブ同数ずつとしたが、そもそも属性概念である「被害-健康」は明確に対極をなすものではなかった。それらを考慮し、改被害IATと養育行動他の測度との関連性について、より詳細な分析が必要であるほか、母親の潜在的被害感を測定するのにより妥当性が高くなるようIATの改善が必要である。

②ゲーム・シミュレーション課題の妥当性

従来用いてきた養育行動尺度は、セルフ・レポート式の質問紙であり、特に不適切な養育行動については、参加者の防衛が混入し、実態を捉えることに困難を抱えていた。そこで、本研究では母親の日頃の行動をゲーム上に再現する中で防衛を掃い、反応・印象(解釈)・記憶など様々な情報処理過程や生理的指標であるグリップ強度など非意識的測度で、その実態に迫ろうとした。

得られた結果は、セルフレポート式の不適切養育行動には、「アイデンティティ喪失感」「短所への潜在的脅迫」が影響を及ぼしたのに対し、ゲーム・シミュレーション課題では幼児の手を引く力など様々な測度に影響を及ぼしたのは「被害的解釈」だった。母親の被害意識が不適切な対処を生むことには変わらないが、母親が申告する不適切な養育行動とゲームの対処方略には、異なる被害意識が影響していた。また不適切な養育行動とゲームの対処方略には直接の関係はみられなかった。これらのことは少なくとも上記の2つの測度は別の側面を測定している可能性がある。しかし、いずれの測度が母親の実際の養育行動をより反映しているのかは疑問の残るところである。この点については、検証することが困難であるが、少なくともゲーム課題で行われた行為が現実生活へ一般化される可能性があるとするれば、ゲーム課題による測定にも意味があると思われた。

<引用文献>

Bugetal, D. B., Lyon, J. E., Cortez, V., & Kranz, J. (1997) Who's the boss? Accessibility of dominance ideation among individuals with low perceptions of inter-personal power. *Journal of Personality and social Psychology*, 72, 1297-1309.

Greenwald, A. G., Nosek, B. A. & Banaji, M. R. (2003) Understanding and using the Implicit Association Test: I. An improved scoring algorithm. *Journal of Personality and Social Psychology*, 85, 197-216.

Greenwald, A. G., Poehlman, T. A., Uhlmann, E. L. & Banaji, M.R. (2009) Understanding and Using the implicit association test:III. Meta-analysis of predictive validity. *Journal of Personality and Social Psychology*, 97(1), 17-41.

Milner, J. S. (2000) Social information processing and physical child abuse. *Theory and Research. Nebraska Symposium in Motivation*, 45, 39-84 University of Nebraska Press.

5. 主な発表論文等

[学会発表] (計4件)

- ①川西千弘・土居淳子 母親の潜在的・顕在的被害感と不適切な養育行動の関連～母親養育意識尺度と被害-加害IATの組み合わせによる分析～ 日本心理学会第81回大会発表論文集 2017
- ②川西千弘・土居淳子 母親の被害意識・養育行動における生活スタイルの影響 日本心理学会第79回大会発表論文集 2015
- ③川西千弘・土居淳子 母親の養育意識が幼児のポジティブ行動解釈に及ぼす影響 日本心理学会第78回大会発表論文集 2014
- ④土居淳子・川西千弘 Ratcliffの拡散モデルに基づくIATデータの分析 日本心理学会第78回大会発表論文集 2014

6. 研究組織

(1) 研究代表者

川西 千弘 (KAWANISHI Chihiro)
京都光華女子大学 健康科学部・教授
研究者番号：70278547

(2) 研究分担者

土居 淳子 (DOI Junko)
京都光華女子大学 キャリア形成学部・教授
研究者番号：00301713